

# 農業の六次産業化の実態と未来

## ー埼玉県さいたま市のある農家の事例からー

古澤 悠斗

農家の高齢化、農家数や農地利用率の減少等、収益の低さ等、日本の農業が多くの問題を抱えている。その一方で、最近では農業×鉄道、第1次産業×第3次産業という他業種とのクロスイノベーションがすでに実現されているケースも出てきている。農業の可能性はまだまだ未知数である。この秘められたポテンシャルを、農業の6次産業化という新たな農業の形から探っていきたい。

まず、6次産業化とは、第1次産業、第2次産業、第3次産業の掛け合わせの上、成立するものである。先行研究から農業の6次産業化の課題について明らかにした。その中で、地域とのつながりが重要であること、人材、資金という面で小規模事業体が6次産業化を実践していくのが難しいことが分かった。これらの点から、小規模事業体に焦点を当て、事例調査から新たな農業の6次産業化の形を見出して行くことが本論の目的である。

次に、6次産業化が全国的に広がり始めた要因として、JAの存在にも注目した。今でも組合員数は1000万人以上が在籍する非常に大きな組織である。しかし、近年では、JAへの不信感から農家や農業事業体の選択の幅が広がり、JA離れが起きている。それに代わるものとして、6次産業化という農業の新しい可能性が注目されている。

このような背景を踏まえて、本論では農山村地域と都市近郊地域の事例調査を行った。農山村地域に関しては、文献資料をもとに長野県飯島町の現状について考察を行った。都市近郊地域に関しては、埼玉県さいたま市にある株式会社エノファへの参与観察とインタビュー調査を実施した。インタビュー結果から、生産だけでなく多角的事業に取り組む農家としての心構えや戦略についての重要性などが明らかになった。

この2地域に共通していたのは、6次産業化の根底にあった掛け合わせという概念に縛られず、女性農業従事者と加工事業、生産と農業イベントといった組み合わせという考え方があった。それぞれの環境を最大限に活かすことに注力するという姿勢が、このような新しい農業の形を生み出していったと考える。

最後に、今回の研究を通して、日本の農業は明るいことを確信した。